

蔦重・馬琴・写楽・越谷新聞

令和7年12月 1日・第11号・〈写楽は十郎兵衛だ〉号・発行・旧日光街道・越谷宿を考える会

古いねえ、写楽は「グループ」だとか、「歌麿」だとか！

主な写楽別人説（昭和64年までの分）

能役者のちに歌舞伎寄贈	提唱者	発表年
能役者・斎藤次左衛門	ユリウメ・タハト	明治43年
能役者・斎藤次左衛門	島居龍蔵	大正14年
能役者・斎藤次左衛門	邦枝完二	昭和4年
某アノニマス絵師	野口米次郎	昭和5年
某貴人	森清太郎	昭和11年
島屋重三郎	横山隆一	昭和31年
門山虎孝	田口卯三郎	昭和32年
船役者・斎藤十郎兵衛	松本清張	昭和32年
阿波藩家老の伴・幸礼俊	小島政二郎	昭和36年
谷文晁	池上浩山人	昭和37年
島飾北斎	横山隆一	昭和38年
能役者・斎藤次左衛門	今東光	昭和39年
某能役者	小野忍重	昭和39年
十返舎一九他共同制作	瀬木慎一	昭和40年
時絵師・飯塚桃庵社中	中村正義	昭和41年
島居清政	若川也寸志	昭和42年
北尾派絵師	林美一	昭和42年
歌川豊国	石沢英太郎	昭和43年
酒井抱一	向井儒夫	昭和43年
島飾北斎	由良哲次	昭和43年
能面師・土左衛門の次郎太	大岡信	昭和43年
島屋重三郎	榎本雄吉	昭和43年
榮松斎長喜、その後司馬江漢等	福富太郎	昭和44年
谷案外	酒井藤吉	昭和44年
一筆系文調	出井祐治	昭和45年
阿波藩絵師・矢野典博	瀬尾良	昭和52年
蔦重工房	鈴木敏夫	昭和55年
山東京伝	谷峯蔵	昭和56年
島屋重三郎	阿部清	昭和56年
島屋重三郎の義父	杉本章子	昭和58年
杉田山絵師・近松島保	高橋克彦	昭和58年
喜多川歌麿	石森章太郎	昭和58年
十返舎一九ら共同制作	宗谷真彌	昭和59年
中村此藏	池田満寿夫	昭和59年
歌川豊国	梅原猛	昭和60年
写楽は写楽	瀬木慎一	昭和60年
オランダ人某	中島節子	昭和60年
狂言作家・篠田金治	渡辺保	昭和62年
喜多川歌麿	土淵正一郎	昭和62年
欄間の影師・指八	六代目歌川豊国	昭和63年
写楽は3人	小山観翁	昭和64年



写楽 市川緞蔵の竹村定之進

東洲斎写楽の絵が
「グループ」で描か

れたものというの

は、昭和40年

(1965)にとなえら

れ～瀬木慎一氏～、

「歌麿」が描いたものだという説は昭和

58年(1983)～石森章太郎氏～、昭和

62(1987)～土淵正一郎氏～、に言われ

ていました。

写楽の絵というのは、まさに常人では描

写楽 中野三敏著 中公新書 中央公論新社

2007刊から

けない絵であって、グループで話合いながら描いたのではなかろうか～と

か、歌麿のような別の超天才でしか、描けないだろうなあということでの

写楽探索方法です。

写楽の探索については、当初は、美術関係の方々の「写楽の絵の描き

方」をベースとした搜索が行われ、結局、「決め手」を欠くことで、写楽と同時代に残された文献から、写楽の実像に迫るという手法がとられるようになってきたのです。そして、その手法が実り、1990年代に「写楽＝斎藤十郎兵衛」説が確定しました。それ以前の探索方法での「写楽推定」は現在では使われておらず、1990年代以前の「グループ説」や「歌麿説」はお蔵入りとなるべき「古い説」なのです。

文献による「写楽探索」で、大きな成果をあげていただいた方は、内田千鶴子さん（平成5年＝1993頃から）、中野三敏さん（平成19年＝2007頃から）とNPO法人・徳島写楽の会（平成8年＝1996頃から）だと思います。その方々による文献探索によって、それまで「実在」でさえ疑問視された東洲斎写楽の実在が明確化（東洲斎写楽＝斎藤十郎兵衛）されたのです。

文献探索的手法で明確化された「東洲斎写楽＝斎藤十郎兵衛」を論破もされないで、そのような事態以前の手法をもって、脚本を書かれる方がおられるとすれば、ご自分の学問の進歩に対する不勉強か、あるいは、それを承知の上で自分の脚本が世間に目立ちさえすればよいという意図か～と思わざるを得ません。

学説が混沌としていて、決着がついていない場合、それは誰でも論戦に加わっていただいても構わないでしょう。しかし、決着がついているとか、ほぼ付いている際には、異論を出される際には、まず、その主な学説に対する論破が必要ではないでしょうか。その主張が単なる思い付きでなく、他の意見にも注意を払われてのことであるということが分かりますから～

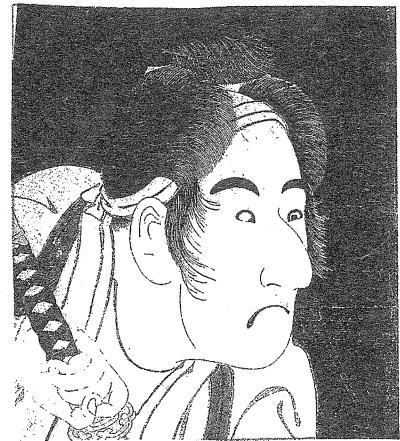
テレビドラマだから、何でも許されるのか

「べらぼう 第45回」を見られての美術評論家・香原斗志氏の感想に対する非難が多く寄せられているようです。

テレビ脚本の盾突くのは学者ばかりとお考えなのか、学者に対する罵詈雑言、^{ばり ぞうごん}「フィクションだから、真実と違ってもいいのだ」「真実と違うというのは野暮だ、無粋だ」との^{あくたい}悪態も見られました。

問題は三つあります。

一つは、「写楽＝斎藤十郎兵衛」という説が、学者たちの中から生まれ、学者たちだけが信じるものであったか、どうか。



写楽 二代目坂東三津五郎の石井源蔵

もう一つは、「フィクションだから、脚本家はストーリーを如何ように作ってもよいのか」ということ。

三つ目は、フィクションに対して真実と違うからと言うのは「野暮だ、無粋だ」と非難することは正しいのかということ。

一つ目については、前述のように「斎藤十郎兵衛説」は学者の中から生まれたのではなく、むしろ、在野の研究者や別分野の研究者（中野三敏氏は江戸時代の文学をフィールドとされていた学者で、美術は専門分野外）から生まれたものであるといえます。そして、それぞれに、専門学者が出来なかった研究を白熱的な努力をなさって、その結果が「斎藤十郎兵衛説」であったのです。学者だけが集まって出された結論ではないことを、くれぐれもご承知いただきたいと思います。

二つ目については、斎藤十郎兵衛の隣家に誰が住んでいたまで分かって

いる現在において、いくらフィクションであっても、真実をベースにして脚本を創作していただかないと困るということです。

三つ目については、「野暮だ」「粋じゃない」とおっしゃる方々に申し上げたいのは「斎藤十郎兵衛説」が固まる前に、どれだけの苦労が積み重なったかをお調べのうえ、そういうご発言をしていただきたいこと。「野暮、粋じゃない」というお言葉がご自分のためにあるのではないかとお思ひになりませんか。

写楽は誰か、の謎は こうして解けた～



写楽・
二代目坂東三津五郎の石井源蔵

なかなか、本物の写楽が50人以上の候補者が出てきて、写楽本が何冊も出て、なおかつ、結論が出なかったところ、ようやく、決着がついたのには、三者の執念とお力がありました。

内田千鶴子さん、中野三敏さん、「NPO法人徳島写楽の会」の皆さまです。

まず、内田千鶴子さん。《1966年生まれ・映画監督・故・内田吐夢氏次男・有作氏と結婚し、1979・写楽の研究を始める》

内田さんは、義父・内田吐夢監督のシナリオライター・水木洋子さん死後の写楽に関するシナリオの依頼状を偶然に見つけ、それから写楽に興味を持たれたようです。NHKテレビの「能役者・斎藤十郎兵衛」番組への協力から「能役者・十郎兵衛」の追跡が始まりました。「能役者」の探索によって、当時の阿波藩能役者は1年ぐらいのお暇時間があつたようだから、写楽が、まさに絵を描いていた寛政6年（1794）に十郎兵衛は33歳の男

④ 盛りであつたなどを突き止められるまでに進まれたのです。

中野三敏さん。《1935 年生まれ・元・九州大学文学部教授・元・福岡大学教授、江戸文化・江戸文学の専門家。2019 年死去》

中野さんは、写楽の絵そのものも、それほど好きでもない～と言われ、研究も写楽という絵師の実像の跡追いの過程であるともおっしゃっておられました。斎藤^{げっしん}月亭^{そうは}著の「増補・浮世絵類考」(天保 14 年・1843)を柱に「江戸^{ほうがくわけ}方角分」「八丁堀絵図」などから、写楽の原像を追跡され、文献上で、十二分の成果を収めていただきました。

それに、NPO 法人・徳島写楽の会の皆さまです。《1997 年設立です》

写楽と考えられる斎藤^{とけいのまはん}十郎兵衛は土圭之間番^{めいちん}という名目で御家人^{ごけしん}として召し抱えられているようだが、もしかすると、御家人として、『寛政重修^{かんせいしゅうしゅう}諸家譜』に菩提寺^{ぼだいし}に関する^{しよかふ}ことも掲載されているかも知れないと思いつかれたメンバーがおられたのです。そして、徳島県立図書館で『諸家譜』を調べると、確かに「築地^{つさしほんがんしほうし}本願寺法光寺」と出ているではありませんか。

電話局と本願寺に問い合わせられて、法光寺の越谷移転が判明。法光寺への電話で、斎藤家の過去帳をお持ちのことが分かりました。

その過去帳には、まさに「八丁堀地蔵橋^{あしゅうどの} 阿洲殿御内 斎藤十郎兵衛」と「増補・浮世絵類考」^{そうは うきよえ るいこう}と同じことが書いてありました。これによって、「浮世絵類考」のウラが取れたのです。

このことを、もっと知っていただきたいのです！

写楽と十郎兵衛 二つの文書の内容一致

①右の写真は越谷市の法光寺さんがお持ちの「斎藤十郎兵衛」の過去帳の一部です。「文政三庚辰年三月七日 大乗院寛雲居士 八丁堀地蔵橋 阿洲殿御内 斎藤十良兵衛 変 行年五十八歳千住二テ火葬」と書いてあります。

②斎藤月岑の「増補・浮世絵類考」には「天明寛政年中の人 俗称斎藤十郎兵衛、居、江戸八丁堀に住す、阿波侯の能役者也－廻りに雲母を摺りたるもの多し」とあります。

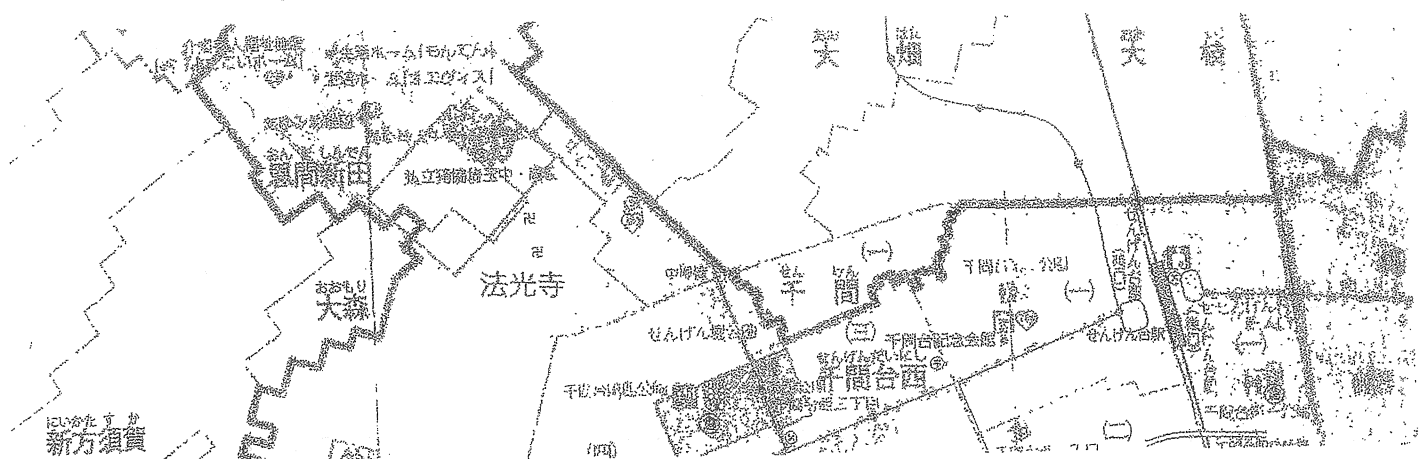
別に書かれた①と②の記述の一致が写楽の実在の証拠です

「写楽の存在」「写楽＝斎藤十郎兵衛」は絶対となりました。

法光寺過去帳
該当箇所

写楽 中野三敏著 中公新書 中央公論新社 2007 刊から

写楽の菩提寺・法光寺は越谷のここに～



斎藤十郎兵衛の書かれた過去帳をお持ちのお寺・法光寺さん
写楽の記念碑と阿波藩のゆかりの蜂須賀桜が境内に並んでいます

⑥ 蜂須賀桜は早咲きですので、関東の河津桜の満開ごろにおこしく下さい
斎藤家の墓は越谷移転前に檀家を離れられたため、もってこれなかったようです。

地図：越谷市広報シティプロモーション課編・刊 R4 から

<東京国立博物館学芸企画部長>

いまだに「写楽は謎の人物」と言う人がいるようですが、阿波徳島藩主・蜂須賀家お抱えの能役者、斎藤十郎兵衛（1763～1820）に間違いありません。～写楽が既存の画派・画風の色に染まっていない絵師だったから、こんな規格外の絵を描くことができたのです。固定観念がないからこそ、すさまじくリアルな役者絵を、自由に描くことができたのではないのでしょうか。～役者の似顔という系譜のなかで、その表現をさらに推し進めようとしたのだと思いますが、リアルを追求するあまり「役柄」という美しいベールまで剥がすことになってしまったのです。～「半歩先の流行」が蔦重の成功の方程式です。同じ戦略で役者絵でもヒットを狙うつもりだったが、写楽の絵は新しすぎた。彼は、まったく美化しない真正のリアリズムを描出してしまった。

<松嶋雅人著 NHK出版新書 NHK出版刊 24.12>

○ステラnetから～「べらぼう」コラム#46「写楽とは何者だったのか」 田辺昌子さん

<元千葉市美術館副館長・国際浮世絵学会常任理事>

近年では、能役者斎藤十郎兵衛説が定着してきています。①斎藤月岑^{げっしん}著（天保15～1844）「増補浮世絵類考」②達磨屋^{だるまや}五一著「浮世絵類考」（栄松斎^{えいしょうさい}長喜老人の話など）③瀬川富三郎編「諸家人名 江戸方角^{わけ}分」④法光寺の十郎兵衛の過去帳～が原因。

寛政5年7月に松平定信が失脚。翌6年に江戸三座の控え櫓が上演決定し、役者絵出版。当時は豊国より売上高は少なかったが、明治30年ごろの外国人への売れ行きはよかった。写楽のクセの強い顔貌^{がんぼう}表現が「個性的でインパクト」をかう西洋人の美意識に受けたのだと思います。 <ステラnetはNHK財団の活動の発信元 25.11>

まだ、全部解明されていない、写楽の謎

謎多い東洲斎写楽。一番大きな謎だった「写楽とは誰か」については、どうやら解明されました。しかし、写楽の謎のすべてではありません。謎の、あと二つは残っています。その①は、「写楽と薦重」はどのように「縁」を結んだか、です。確かに、薦重と歌麿の縁が少し疎遠になった時です。師匠のいない写楽が薦重に売り込みに行ったか。薦重が「独自の絵を描く写楽を知り、どんな形でアクションを起こしたか～まったくの「謎」です。そして②は、約10か月間、薦重の下で絵を描いた写楽が筆を折ったか～です。土分として「浮世絵」を描くことが危なくなったからか、薦重の要求するテンポに合わすことが出来なかったためか、あるいは絵を描く才能をすり減らしてしまったか～これは永遠の謎として残りそうです。

写楽と越谷のもう一つのご縁

写楽と越谷の間には「過去帳の大きなご縁」に比べると、小さなものではありますが、他にもご縁があります。それは、^{はつちやうけり}八丁堀地蔵橋の写楽の住まいの隣に^{むつたはるの}村田春海という国学者が住んでいて、そこに越谷^{おんま}恩間の国学者・^{こうよう}渡辺荒陽の娘・^{たせこ}多勢子が養女に入り、多勢子は隣の写楽の息子を可愛がって、その後、自分の養子として「^{はつめな}村田春路」という名前を付け、村田家のいわば「家業」の国学者の跡を継がせているというご縁なのです。多勢子の実家である「^{おんま}恩間」と、法光寺さんが築地から引っ越してこられた^{さんのみや}三野宮とはすぐご近所にあるという不思議なご縁。